

連載

63 在宅医療奮闘記

平成7年より
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義 (64歳・内科)

平成7年、老人デイケア開設時の苦勞と感動!!
～涙あり、笑いあり、そして出会いあり～

ある日、K子さん(83歳・女性)に友人A子さん(85歳・女性)を紹介され、お宅へ同行しました。

世の中そんな
甘い話はないよ!



A子さんの家は、当院から7キロメートルほど離れた田園地帯にありました。そこは、私の実家(宇和島市柿原)に似た匂いがして、私は思わず深呼吸をしていました。

老人デイケアについて「国の方針で始まった制度で、車で送迎してもらえますし、リハビリやレクリエーションもあって、同世代の方々とお話ししながらお食事までできて、楽しく元気になりますよ」と説明し始めたところ、傍らでテレビを見ていたお孫さんが「おばあちゃん!世の中そんな甘い話はないよ! とりあえず、断りなさい!」と、叫ぶように言ったのです。その時、テレビには、某宗教法人のサティアンが搜索され、教祖が逮捕されている光景が繰り返し流れていました。

とりあえず、老人デイケア見学の了承をいただき、その後参加されるようになりましたが、またたく間に定員でいっぱいになり、当初の苦勞は嘘のようでした。

デイケア室で、カラオケから島津亜矢の演歌「母ごころ宅配便」の一節「♪ 風邪をひくなああと送ってくれた～ 綿入れ羽織が泣かせるね～♪」が流れると、患者さんの目には大粒の涙があふれていました。日舞の名取りだとういう患者さんは、着物を羽織り扇子を持ち、出立ちは流石と思われました。曲が流れると、1メートル四方で右を向き左を向き、踊ろうとしますが、膝の調子が悪いため、かがむ事ができず、振りが満足にできません。しかし、ご本人は大真面目で、とても楽しそうでした。私には、「あっちむいてホイ!こっちむいてホイ!」のように見えて、思わず吹き出してしまいました。とっさに我に返った私でしたが、とても恥ずかしくなりました。

40歳代の私の人間性が未熟であったと、今でも思い出すと赤面するできごとでした。

平成12年度より、介護保険制度の施行後、在宅での患者さん中心の生活療養支援のため、医療・看護・介護サービス体制が構築されました。

当然、重症の病状時には病院への短期入院が必要となります。また、がんの確定診断のための精査入院もします。それらも、その後の在宅(自宅・施設)療養継続のため、社会保障の基本のひとつとなっています。

平成7年から始まった「老人デイケア」は、介護保険制度が始まる夜明けの序曲であり、現在のデサービス花盛り時代に繋がったのです。

JASRAC 出 1415248-401

「お医者さんが来てくれる」

24時間・365日態勢で対応(松山市全域)

私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。



医師数 19名
(常勤6名、非常勤13名)

内科・外科専門医 16名
(国立がんセンター勤務歴有3名)

精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
(ペインクリニック科)

末期がん治療(緩和ケア)
相談室開設!

Hyper Blood Viscosity(高血液粘度群)を科学する
臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>